

青海を

青海をたゆたひつくす胆あらば埒明く道も案じつくへし
蘇生

ラチたよるシャドーロールの馬なれば片目を開かむ夏のローカル
鮫鯨

山壊し里に追いやり熊の目にスプレーかけてお仕置きだとさ
雛菊

因果律因果心報知りてなほ生きとし生けるものの哀しさ
蘇生

花巻の駅降り立てば水無月の空は夜鷹の星のレリーフ
丹仙

笛の音に誘はれ見上ぐ天の川双子の星の旅物語
文枝

万華鏡アースタワーの中に入り見上ぐる彩り宙（そら）思ひたり
れん

半分は探し物せし自分史の残るページは万華鏡と書く
真奈

産声も挙げず生まれし嬰兒の自分史今も母の胎内
文枝

哀しいな哀しすぎるよ火垂るの子なんて書きやあいんだろかね
海月

悲しとも愛しとも書く「かなし」とはものあわれのキーワードなり
茉莉花

宵あかり白花浮かぶ山法師ひとのかなしみ小雨にぬれて
れん

花先に露をとどめて朝の日に寡黙なりしが名は山法師
蘇生

漢土では四照花と呼ぶ山法師 四方よもを照らせよ法(タルマ)の輝き
鮫鯨

わが袖に冥加あれかし一隅を守りて千里照らす国寶
丹仙

大いなる悲しみの眼に守られて修羅の涙の星となるらん
真奈

真夜中にほとりと一つ紫陽花は涙のしづく集まりし花
雛菊

紫陽花の白きは歳のせぬなるか憶ふ昔の春の青きを
鮫鯨

天地玄黄なれど日の本鎌倉は雨紫陽花の七色に顕つ
丹仙

人らみなあじさい寺に集まらば歌壇に声なし天に星なし
鮫鯨

紫陽花の花は散らぬとさにあらぶきふひとりの友は旅立つ

れん

大空の緋ひとひらも動かさず友は逝きたり五十路半ばに

茉莉花

骨を組み肉を太らす身にあれど花散る夜は月をも恨む

鮫鱈

惜しみなく花散る夜のくらがりに遠き無念の魂に出逢ふや

真奈

一粒の麦となれかし散る花の数かぎりなしいのちの底ひ

れん

北東の風が大樹の葉を散らし初夏は一転梅雨寒の朝

蘇生

雨降らば野口英世も傘ささむコンベニ買った黒き蝙蝠

鮫鱈

青梅の二つ地に落ちピアニシモ雨降り足らぬ空を窺ふ

丹仙

雨靴もレインコートも身につけず闊歩するなり若きをみなは

茉莉花

手際よく濯ぎ物干す梅雨晴れ間晴耕雨読は夢のモチーフ

文枝

梅雨晴間霧吹きかけし薄物の蜉蝣のごと竿に揺れをり

真奈

陽に映ゆる無縫の天衣干す人の影をあぶぎてたたずむロミオ

鮫鱈

薔薇といふ名前は知らず是の花は永遠の昔ゆ汝のうちに咲く

丹仙

羽衣を隠す私の心根を見透かす如き深きまなざし

海斗

かくすよりいったらいいよ好きならば両手ひろげてとおせんぼして

鮫鱈

通せんぼ通せんぼして誰も無い天神様の薄暗がりよ

海月

境内の人の影なき手水には暫し明るき空が滴る

蘇生

ひさかたの空を蜚びゆくあぶら虫浮く塵の身も羽あり眼あり

鮫鱈

無者といふ福音説きし父の日の明るき空に沙羅の花散る

丹仙

三代の父存命の平らかな世の萬緑の常しえにあれ

蘇生

「路傍の石」読み聞かせれば父の泣く吾一に重なる少年時代

雛菊

父の日に緋のパンツを買ったのさだれが履くのか知らねえけれど

海月

すると絹の靴下高く投げカッコ良かった往昔の映画

真奈

鳩時計スイスを笑ふ第三の男の映画みて桜桃忌

丹仙

三十年太宰眠れる街に住み桜桃忌には行かず過ぎたり

茉莉花

あれこれの明け暮れに追はれ過ぎてゐし海人忌ふと浮かべたれども

れん

明石てふ海で泳いださなんも知らないなんも知らない無銭旅行で

海月

列島のおらが浜にはおらが蛸須磨の明石も江戸前もよし

蘇生

キレのいい鯨背の衆もいなくなり多言語飛び交う今の大江戸

茉莉花

わが家は代々江戸に住みをれど母は伊予なり妻は長州

鮫鱈

流感に「久松留守」の札貼れば感染しない江戸ジョークとか

真奈

大江戸という名の都言地下鉄のその名の訳を誰か知るかや

蘇生

しみじみと都会の孤独噛み締めり迷子の子猫麻布十番

文枝

若きころの東山魁夷の表紙絵にであう楽しみ銀座の画廊

雛菊

年寄れば思ひ出ばかりが増えてをり列なす蟻をひねもす数ふ

鮫鱈

碌々となほ生きてあり蟻の「とき8888ゲットを狙ふ

堂島屋

時にあい連作和歌に日次して五歳千首は指呼の間に

蘇生

合歡の花ねむりに落ちる掌を時のしっぽはすり抜けてゆく

ぼぼな

合コンは合歡のなまるにはあらねども時は酒なり恋も酒なり

鮫鱈

紆余にては悲喜交々に酒ありき末は交々酒を愛でなむ

蘇生

袈裟を脱ぎ叫びて踊る佐渡おけさ醒めて迎へる今朝のやす酒

鮫鱈

わが名いかで惜しまざらむと澄江堂風に舞ひたる艶のすげ笠

真奈

たちあがる蓮の群れにやすらぎぬ風わたりきてひとひらの舞ふ

れん

ゆらぎつつ色を秘めたる花の芽の今朝は満ちたり凌霄の花

蘇生

リビングにラベンダーのかをり満つりボンで包まむこのひとときも

雛菊

空青く丘いちめんのラベンダー時間につけよ永き休止符

真奈

梅雨の間の空の青さや紫の山虎の尾のはやゆれて咲く

れん

梅雨の間の明るき海の潮の目に鳥山立ちて遠ざかりゆく

蘇生

サイパンのバンザイクリフに海さげぶ国のほまれはゆめ説くまじと

鮫鱈

潮騒の微か遙かに戻り来る常なるものはいつこなりやと

海斗

磯を這う潮の音が長調にすでに真夏は波のまにまに

蘇生

海底にチェロ響きたる鳥の歌一片の自由空に求めて

真奈

一片ひとひらへこころ托しぬ知らずして山棲みの花の自由の底ひ

れん

山棲みの花鳥諷詠思ふまま天地こそりてシャッターチャンス

文枝

鳥に空蝶に花あり人に歌池に首あり亀らにカメラ

鮫鱈

花鳥の奥を尋ぬる旅にして生れしばかりの星撮らんかな

かわせみ

梅雨の間に薄曇りたるもつれしきか年にひと夜の星合の空

真奈

ほつたるに誘かれてゆく星合は母の産土もつあらぬ村

かわせみ

古代蓮幾千年もの眠りより覚めて咲きたるその産土に

雛菊

ロータスと呼ばれし紋様砂漠なる古代にのこるロマン聞きたり

れん

蓮の実を胸に抱きて眠り姫とはに目覚めず月の砂漠に

かはせみ

竹林の涼しき風にひと時の夢にうつつに思つ姫あり

蘇生

仙人球(サボテン)の中にも姫は眠りをりそそやきかけらば口語を覚ゆ

鮫鱈

大地より響もす聲は恨(ハン)の國ハンソリといふ甲ひの唄

丹仙

底籠る恨のひびきよパンソリを謡つオモエの遠き眼差し

かわせみ

残照に円を描きて昇りゆく鳶は高空祈る如くに

蘇生

残照に灼ける路地底南口マツカリ呑んで今宵も喧嘩 海月

今君は夏果つる日の武蔵野館と詠ひし友の永遠に眠れり 真奈

老いの日の果つるはいつか有らむとて楽しく目覚む明日の吾あり 蘇生

わが財布冷凍庫内に三日居てこの現実を老いと笑おう 雛菊

ボケたふり死んだふりして老いの知恵フリーズ財布も神の恩寵 真奈

フリーズ財布の紐締めなほし老いてなほ心はあつく保ちて往かな かわせみ

「ねむの木のこともちとまり子展」にて

まり子さんに導かれたる子どもらの歌声清く心あつくなり 雛菊

終りまで聴いたことなきラジオあり鐘が鳴りますキンコンカンと 海月

蓮なるめでつつ鳴るは鐘楼堂朝の響きの深くしみくる れん

朝涼の清かな風に交わりつ午前六時の鐘がとどきぬ 蘇生

一声を鳴きて渡りぬ不如帰このあかときの夢に入りきて かわせみ

一枚の切符となりし不如帰少年の眸もて遠ざかり行く 真奈

屋根棟に四十九日は留まりて一座に一言もの申すらん 千種

申しおくこと並でいい君ひとりおればよいのだ曼珠沙華咲く 海月

桃李和歌連作百首歌集

第六六〇一首より六七〇〇首迄

平成一七年六月六日より平成一七年七月二〇日